論文

神々の来臨―脇能における思想的多様性

原田香織

一　祝言

高砂や　この浦舟に帆を上げて　この浦舟に帆を上げて
月もろともにいでしほの　波のあはぢの島影や　遠くなるを
の沖過ぎて　はや住江に着きにけり[1]

これは応永年間に作られた世阿弥の『高砂』のワキの待ち謡の部分である。祝言といえば、近代の婚礼の儀においては定番といえ『高砂』のこの箇所を思い浮かべる向きも多い。

周知の通り、世阿弥は『三道』において『高砂』を「相老（相生）」という古名で「近来押し出だして見えつる世上の風体の数々」のなかの一作品として、「老体」の規範曲に挙げている[2]。

この『高砂』（五流）は、和歌が国家泰平へとつながる構造をもつ作品群の一つであり、世阿弥の代表作である。内容は、ワキ肥後国阿蘇神主友成が、播州高砂の浦を尋ねると、木守の尉と姥が高砂住吉の相生の松の謂れを『万葉集』と『古今和歌集』に譬え、和歌の繁栄が国家泰平につながるといい、長寿の夫婦のめでたさを伝え、また後場では『伊勢物語』百十七段の有名な贈答歌でもある住吉明神の和歌を配置して、和歌の神としてのシテ住吉明神が天下泰平を言祝ぐというものである。

表現技巧としては、和歌の徳を根幹として換喩（メトニミー）の修辞技巧により、国家平和の象徴が松の緑の永遠性と和歌を解き明かすこと、そして姥と尉という長寿の夫婦の絆が語られ、後場において住吉明神の登場により雅楽を舞い国土安泰と繋がる構造になっている。『申楽談儀』において「なほし鰭があるなり」というのは、和歌と松と夫婦という重層的イメージによる国家顕彰となっている点にあろう。なお、世阿弥自身の意識のなかでは、老体の代表曲として『三道』では「八幡、相老、養老、老松、塩釜、蟻通」が挙げられている。

さて、祝言の能のなかで世阿弥が基本として挙げているのは『弓八幡』であり、『申楽談儀』においては、「先、祝言のかゝり直成道より書き習ふべし。直成体は弓八幡也。曲もなく、真直成能也。当御代の初めのために書きたる能なれば、秘事もなし」とある。当御代については、表章氏や天野文雄氏の御論考があり、足利将軍家の何代目かという疑義が呈されるが、足利義持をさすとされ、成立は「応永元年十二月義持将軍宣下」まもないころとされる。(3)

『弓八幡』（五流）の内容は、ワキ後宇多院の廷臣が、男山八幡宮の二月初卯の神事に参詣する。シテは桑の弓、蓬の矢という平和の象徴と、御祭神でもある神功皇后の征韓など男山八幡宮の縁起を語る。シテは石末社の高良神であり、清水八幡宮の徳を称えるというものである。ここで重要なのはまず世阿弥が本説正しくという点について重んじていたことである。本説は『石清水八幡宮縁起』に基いているが、実は石清水八幡宮にかかわることば「石清水」は平安時代から紀貫之などにより和歌の題材として扱われ「男山」「八幡」を詠み込んだ歌は多い。清少納言は『枕草子』第二八七段「神は、松の尾」において、

神は、松の尾、八幡、この国の帝にておはしましけむこそめでたけれ。行幸などに、名葱の花の御輿にたてまつるなど、いとめでたし。

と述べ、石清水八幡宮を顕彰し、応神天皇・比咩大神・神功皇后をご祭神とする由緒や行幸の様子を伝えている。

石清水八幡宮は『石清水八幡宮史料叢書』や『石清水八幡宮文書』類にあるように歴史的には、古くより王権守護の神として皇室の厚い尊崇を受け、伊勢神社と並び称せられている。能『弓八幡』では、ワキが後宇多院の臣下と設定されているが、実際の後宇多天皇（一二六七―一三二四）の時代には、いわゆる元寇の乱があったことを背景に、石清水神社参詣が行われた。因みに後宇多天皇は、鎌倉時代の第九十一代天皇であり亀山天皇の第二子、後醍醐天皇の父である。大覚寺統の天皇の臣下という設定は、世阿弥時代において、南北朝の争乱の起点が想起される。

ここで気になるのは、天皇家を扱う場合に能の世界において「当今に仕へ奉る臣下」という朧化表現が多い。古代の天皇名は記される傾向があるものの、同時代はあえてそれを避けるという風潮から考えると、名前を敢えて記すことにより過去化するという大覚寺統の統合に意味があった可能性もある。(4)

一方、土地の縁起説、国土創生につながるような作品は、現在の皇統へとつながる欽明天皇臣下（『江野島』）、聖代として後世においてもなお憧憬の対象とされた延喜の帝（醍醐天皇）臣下（『竹生島』）等、天皇名により想起されるものが異なる。ワキの機能が脇能においては、より具体性を帯びている点にも注意が必要ともいえよう。

さて、今谷明氏『室町の王権』（一九九〇年）など一連の研究で氏がご指摘のように、足利義満には王権簒奪計画ともよべるものがある。天皇家賛美が直接的に将軍家賛美へつながるように類似性からの価値の移行を意識していたのが足利義満であり、この石清水八幡宮に関しても、神祇歌を作成している。例えば後宇多天皇の石清水八幡宮信仰は『続千載和歌集』神祇九一九番には、

百首歌めされし次

世を思ふ我が末まもれ石清水きよき心のながれ久しく

とあり、この歌は文保二年百首歌のころに成立した作品であり石清水八幡宮信仰と皇統の継続を祈願した歌であるが、実は父の亀山天皇も『続拾遺和歌集』巻二〇神祇一四一八番に、

石清水絶えぬ流れは身に受けつわが世の末を神にまかせむ

と皇統継続を祈念する歌を詠んでいる。これに対して興味深いことには、足利義満には、

たのむかな我みなもとの石清水流れの末を神に任せて

という歌がある。これは『新後拾遺和歌集』巻十九神祇一五一七番に「百首歌奉りしとき　神祇」という詞書きで、下の句は意図的に巧んだ類似の表現をとったといえよう。

義満の場合には源氏の末を神に任せているのであり、天皇家とは違う立場であるのは明らかである。足利将軍家にとっては源氏の氏神として石清水社への信仰を示している。しかしながら、足利将軍義満の和歌の表現の類似性は明らかであり、単に和歌表現の常套で解決できる問題ではない。これは歴代続いていき、原本は消失したが六代将軍義教は『石清水八幡宮御縁起絵巻』を奉納するなど、室町幕府にとっては、政治的機構の権威的な背景を創り上げる重要な場である。確かに石清水八幡宮は皇室と武家と両用の信仰を得ている。しかし将軍家が、石清水八幡宮に対して皇室守護の神であることを意識した場合には、単に弓矢の神、武神であることによる側面のみを捉えず、王権を意識した形式性を模倣することになる。ここに、両義性がある。

この二重性は、祝福の場が石清水八幡宮という場に設定されればこそ、当御代祝福が天皇家祝福と同時にそのまま足利将軍家祝福へと機能する点で、石清水社は絶好の場であったといえる。脇能においては「君を守りの神国」「此君の神徳」という語も同時に詞章には現れるが、神を称えることが皇統を称え、北朝方を支持した将軍家源氏の血統を称えることになる。

二　脇能

脇能は、世阿弥時代においては翁の脇の猿楽として、祝言をその内容としている。脇能の解説として、一例を挙げれば「国土を祝福し、豊穣を予福し、神社、宮寺（両部信仰の神社）の縁起を語るのを主たる内容とする」（味方健）（『新版能・狂言事典』平凡社）とあるように、神が登場する祝言的な内容と説明されることが多いが、現代においては、シテが神という性質から「めでたさ」という括りによって画一的に扱われがちである。

一方、脇能の成立当初はどうであったのか。世阿弥は能楽論書において「祝言」を重視しており、『風姿花伝』第三問答条々・第二においては「先、脇の申楽には、いかにも本説正しき事の、しとやかなるが、さのみに細かになく、音曲・はたらきも大かたの風体にて、する〳〵と、安くすべし。第一、祝言なるべし。いかによき脇の申楽なりとも。祝言欠けてはかなふべからず」とある。つまり脇能は、本説としての典拠が正しく引用され、安定した内容で、祝福を込めたものであり、脇能が祝言よりに形成されていったことが明らかである。

また世阿弥は、『音曲口伝』において「祝言」と「ばうをく」とを対立的にとらえ、「祝言」を「喜ぶ声、出る息」とした。『五音』上においては「祝言・幽曲・恋慕・哀傷・闌曲」のなかで、祝言を「安全音」として基本に据えている点、注意が必要であろう。祝言が、始発点としてあり、五音のそれぞれの音曲を謡う力があるのは、つまり「祝言ノ安全音ノ力也」ということで、そこを基盤にして構築されている。

祝言の性質をしる一つの手がかりとして、『申楽談儀』において世阿弥は「祝言は、直に正しくて、面白き曲は有べからず。九位にとらば、正花風成べし」と、そのまっすぐな性質と正統性について言及があり、また『五音曲条々』においても

一、祝言ト者、安楽音也。直ニ云タルガ、ヤス〳〵トクダリテ、治声ナルカヽリ也。此ヤスク云流シタルカヽリ〈正体全音、天政ノ位〉ヲ、大事ニ思ウ宛テガイ、又大事也。念ロウスベシ。

とある。祝言は基本的な要件としてある。

確かに室町時代から江戸時代にかけては、祝言能が、将軍即位宣下祝賀能など国家的顕彰の行事の際には、重視されていた。江戸時代において幕府により演目などが管理されていたのは周知の通りである。現代の能において、上演回数も少なくなりがちな脇能であるが、実は神道的な内容に収斂するだけではなく、室町文化の影響を受けて、国家と権力機構とを引き入れる形で多彩に思想的な導入がなされている。何を導きいれることによって、脇能が祝言の内容となるのか。

現行曲において脇能は、三十九曲とされる。『高砂』・『弓八幡』・『養老』・『淡路』・『志賀』・『代主』・『松尾』・『御裳濯』・『老松』・『白楽天』・『放生川』・『難波』・『東方朔』・『道明寺』・『大社』・『白髭』・『源太夫』・『寝覚』・『富士山』・『嵐山』・『賀茂』・『竹生島』・『金札』・『岩船』・『江野島』・『久世戸』・『逆矛』・『氷室』・『布刈』・『右近』・『西王母』・『呉羽』・『鵜祭』・『佐保山』・『玉井』・『絵馬』・『鶴亀』・『輪蔵』・『大典』である。無論、現行曲としてあるが五流すべてに演じられているとは限らない。

このうち『大典』（観世）は、藤代禎輔作詞、観世左近作曲であり、大正天皇即位を祝福した新作能であり、明治天皇の御聖代を引き継いだ御代を言祝ぐ内容となっている。また『要石』は、江戸時代（一八四四年）水戸藩主徳川斉昭の作であり、『常陸国風土記』に拠り、鹿島神宮を訪れた奉幣使の前に、建御雷神が現れ神代のさまを伝える。また、現在祝言能といわれるのは、番組の最後にめでたい内容の演目を脇能を半能として行う形式であり、『金札』や『岩船』は半能形式で演じられる。

准祝言といわれるのは、祝言的な内容でありながらも、現在は四番目物とされる『雨月』（金春禅竹）や『巻絹』、五番目物とされる『春日竜神』『国栖』がある。また仏教の讃嘆については、脇能において室町時代特有の思想として特殊とも思われる一群で、脇能の祝言的な性質において特異である。祝言は国家顕彰であり、そこには基本的に日本固有の思想である神道の内容が入るのが正統といえる。

ここで脇能の作品群から、脇能の題材をもとに、その基本的な

性質を以下の通りに分類してみる。脇能の作品が多様な題材を内包している点が明らかである。

A　日本神話―国土創生神話　伊弉諾神・伊邪那美神を語るなど記紀神話による作品群

例『淡路』・『金札』・『逆矛』

B　和歌顕彰―『古今和歌集』仮名序・和歌の繁栄・和歌の神住吉明神が国家安泰につながるという作品群

例『高砂』・『難波』・『佐保山』・『志賀』・『白楽天』

C　三国思想による異国の神の作りだす祝祭的な作品群

例『西王母』・『呉羽』・『東方朔』・『鶴亀』

D　天皇家の尊崇の対象である伊勢神宮への信仰を示す作品群

例『御裳濯』・『絵馬』

E　武家による国家統一のための氏神の信仰

例『弓八幡』・『放生川』

F　縁起伝承を題材とした作品群

G　寺社縁起や仏教行事などによる仏教讃嘆

脇能は、以上のように非常に多様な思想が錯綜する形でありながら、祝言、所謂ひとつの祝賀的な空間の構築・国土への祝福という方向性へと向かっている。その際に利用される題材は記紀神話から歌論、和歌のもつ神話的な世界、対外思想から三国思想、寺院神社の縁起伝承などである。舞台上にそうした宗教的に神聖な場を形成し、個々の神々の性質の違いを讃嘆することにより、国土信仰と国家安泰を予祝するのである。

三

紙幅に限りがあるため全体を論じることはできないが、例えば、先の分類のAは脇能の王道ともいえる作品であるが、これについて触れていこう。脇能は翁の脇であり、『翁』においては「天下泰平国土安穏　今日の御祈祷なり」という詞章があり、この祈祷の内容が、祝祭の基本である。国土安穏は、天下国家を支配する上で重要な要因となるが、国土を崇めるという思想は、神代の時代の国生みを祝福することへと直結する。

まず、『古事記』・『日本書紀』における記紀神話から解き明かす原初的な日本国家創生神話が語られる点に注目すれば、原初的に伊弉諾神・伊弉冉神が国土、現世と冥界という世界を創出する。これが日本国家と日本人が創生される根源的始まりである。脇能はこの原初的な空間を呼び起こす点に眼目がある。

具体的には、記紀神話において語りだされる神話的な内容は、天地開闢から始まり、天之御中主神・高御産巣日神・神産巣日神の造化三神から始まり、別天津神、そして神代七代と続いており その最後に生まれた神が日本国土を創成する。それが、伊弉諾・伊弉冉神である。

つまり記紀神話において伊弉諾・伊弉冉神により日本国土が形成される過程において、淡路島はその最初に生み出された島であり、記念すべき第一の国土である。『古事記』では淡道之穂之狭別島、『日本書紀』では淡路洲とされる。

その原初的な内容を語る能『淡路』は、部分的に観阿弥作であ

ることが確認されており、『五音』上「祝言」には、

淡路　亡父曲（節舞）

【上】夫天地カイビヤクノ初メトイツパ、（混沌未分やうやく分かれて）〈是ヲ略ス〉

（さし・曲舞）

【上】天下を保ち給ふ事、すべて八十三万、六千七百余歳也。かゝるめでたき王子たちに、御代をゆづり葉の権現と、あらはれおはします、いざなぎいざなみの御代も、ただ今の国土なるべし。

（是ハ、祝言〆闌曲・幽曲声味有。能々念籠可有）

とある。

ここで省略されている部分は、現行曲では、陰陽五行の木火土が伊弉諾で金水が伊邪那美となり、淡路の国から二柱の御神が、おのころ島から大八島を作り、紀国、伊勢志摩日向、四つの海岸、日神月神蛭子素戔嗚、地神五代の始めとして出現し、皇孫は日向国に天降りて、地神第四火火出見の皇子が誕生するという経緯である。

日本国土の創成と神々の誕生、このようなある種、厳粛ともいえる神話空間を再現することに注意が必要であろう。武家社会における神話空間の再創出は、正統性への顕現であり、天孫降臨という天皇家へと連なる権威性を誇示するが、天皇家讃嘆がそのまま権威として室町将軍家によってすり替わる、或は受け継がれる構造になっている。

この『淡路』は現行五流で行われているが、内容は、住吉・玉津島からワキ廷臣が神代の古跡を見るために淡路島へ参詣すると、神徳を崇めつつ御神田の水口に幣帛を立てる風景が見え、前シテ老翁から天地開闢の昔から伊弉諾神・伊邪那美神の二柱の国土創生神話が語られて、後シテ伊弉諾神が現れ神楽を舞い神代の時代の原初的な神話空間を、当代に続くものとして雄渾に示す、というものである。

全体に「淡路の神代」「神代の古蹟」「神の代の蹟を残して」「神代は遠からず」「神の代の道直に」「神の代の御末はあらたなりけり」と神代という語が多用され、全体的に神代の昔を今に再現するという趣向であり、伊弉諾神、伊弉冉神については、陰陽二柱として重要である。世阿弥の最晩年の佐渡配流の際に書かれた小謡集『金島書』北山においても、

しかれば伊弉諾伊弉冊の、その神の代の今ことに、御影を分て伊弉諾は、熊野権現とあらはれ、南山の雲に種蒔きて、国家を治め給へば、伊弉冊は、白山権現と示現し、北海に種を収めつゝ、菩提涅槃の月影、この佐渡の国や北山、毎月毎日の影向も、今に絶ゑせねば、国土豊かに民厚き、雲の白山も伊弉冊も、治まる佐渡の海とかや。

と、配流地の佐渡を祝言の謡にしている。中世神話が独自の展開を遂げ、伝承に基づきそれを新たに語りだす一例といえよう。無論、「権現」は本地垂迹思想であり、菩提涅槃とここに仏教的要素が介在している。

さて、なぜ室町期において、『古事記』『日本書紀』における神話が語られる時代となるのか。それは南北朝の動乱が与えた影響

が大きく、所謂、皇室内部における持明院統と大覚寺統という両統迭立の時代が齎した結果といえる。南朝方は後醍醐天皇が京都から脱出して奈良の吉野に遷宮するが、そのときの思想的根拠を示す文献として北畠親房『神皇正統記』がある。『神皇正統記』巻一においては、序論として大日本（やまと）は神国であるという思想を展開しており、天地開闢と天神七代から始まる神々の名とその神話を語り、天照大神、天忍穂耳尊、天津彦々火瓊々杵尊、また三種の神器についても語られる。そして、彦火々出見尊、鸕鷀草葺不合尊と続くのである。ある意味で日本の正統を神話に求めた時代ともいえ、それを呼び起こすために再び神話的を創り上げていく。

たとえば、古い作品として『金札』前場のワキのサシ上歌と一致する箇所が、『五音』上にある。以下の通りである。

伏見　亡父曲付

【指声】夫久方ノ神代ヨリ、天地開ケシ国ノハジメ、

（天のしほこの直なれや、名も二柱の神爰に、八島の国を作をき、すべら世なれや大君の、御影のどけき時とかや、

あほによし　ならの葉守りの神心、〳〵

この「伏見」と題する謡は『金札』に導入された。『金札』は、観阿弥作である可能性が高く、現行五流で行われている。内容はワキ桓武天皇の勅使が大宮作りのために伏見へと向かう。伊勢の国あこぎが浦からきた参詣の老人と、木尽くしで、対話しているうちに、不思議にも空から金札が降り下ってくる。『金札』には伏見の誓願が書かれており、宮から金札の神、伊勢大神宮の使いとしての天太玉神が現れ、弓矢で悪魔を射払い金胎両部の形をみせ、治まる世を称える。金胎両部は、両部神道の教えであり、密教思想と伊勢内宮・外宮の神の習合である。作品は神が中心に讃えらえているが、神仏習合の基本となった神道説が両部神道などから中世において展開していくというものである。このように神道的な特徴が色濃い作品であっても、そこに仏教的な要素が、ほぼ無意識ともいえる形で詞章に入り込んでくるのである。

四

中世日本における宗教的な思想の混在は、神道のもつ八百万神の存在を認めるという性質に起因するといえる。三教一致思想は、日本において仏教・儒教・神道の存立が矛盾しないものとして可能であることを指すが、謡曲においてもその影響を色濃く受けており、詞章の中に思想的差異性がないものとして表現される。例えば、『代主』（観世）は、金春禅竹の作かと言われる。内容はワキ京都賀茂神社の神職が、賀茂の本社であるという奈良葛城の賀茂明神に参詣して、由緒を聞くという設定である。葛城の高間山は、胎蔵界・金剛界の両部一法門を現すという。ここには密教思想が入り込んでおり、シテ事代主神が現れて舞を舞う。

また、神社として崇められつつも『松尾』（宝生）は、ワキの臣下が秋の紅葉の季節に、京都西山の松尾明神に参詣すると、尉が、神は人天百王の守護神であり、和光同塵・利生方便・本地垂迹の理を説き、仏教的な思想を示した上で、松尾明神が神を祝福して夜神楽を舞う。

また、一方で神仏習合は御霊信仰をもとに菅原道真が北野天満宮へと神格化されていく過程においては、天部に位置づけられ、御法善神となり、天神信仰は多様な形態で発展していく。

例えば『輪蔵』（観世・宝生・喜多）は、観世長俊の作品であるが、北野天満宮で行われる輪蔵をまわす行事を霊験として示す。四番目物にも配置されるが、祝言という性質をもつものとして認識されたのは、当然のことながら北野天満宮の天神信仰にある。学問の神としての信仰は菅原道真の学才にあり、それらは『菅家文草』『菅家後集』等からも明らかであるが、道真が政争に巻き込まれ讒言されて大宰府左遷となり、一族は没落、その地において失意のうちに逝去するのは著名な話である。またその後の左大臣と死後追贈され正一位太政大臣へ、そして怨霊説話が形成され天神へと崇敬の対象となる。その間にも種々の伝承を生み、仏教思想と天神信仰が重なる形となって思想的に展開した。天神信仰においては、天満大自在天神として多くの眷属を従えているが、神仏習合の世界観が現れている。

『輪蔵』の内容は北野天神を訪れた僧（ワキ）に、シテ傅大士が童子普成・普建を伴って現れ釈迦一代説法の、火天（ツレ）が輪蔵を回して見せる。輪蔵には五千余巻の経典を収めている。学問の神でもある天神信仰の上に、神仏一如観と重ねられた当時の思想が特徴的で、仏教の釈迦一代の説法に基づく経典賛美という当時の思想が色濃い作品といえる。この作品は、有難い説法、転読や経典そのものの力を賛美することにより、結果的に祝賀となっている。

このように神道と仏教との関係については、本地垂迹思想により、中世の当時の民衆にとってはその差異性を意識しない事が多い。脇能は基本的には末社の神々がそこに出現し縁起を語り、祝福の舞を舞うという様式が多いが、中世社会においては純粋な神道賛美ではなく、神仏習合などの思想により、仏教的な要素が強く入り込んでくる点が特徴的といえよう。日本の神が仏の側面をもつのは、源氏の氏神でもある八幡神が八幡大菩薩を名乗ることや、謡曲詞章の随所に見られる「神といひ仏といひ唯これ水波の隔てにて」と神仏が「水波」として、その本質は同じでありながら、顕現の形に差異があることなどから明らかである。

同じく天神信仰と仏教ということになると、本脇能ではない作品群のなかで『道明寺』（五流）は、作者未詳で、『江談抄』・『道明寺天満宮由緒』等に拠る伝承から成る。もともとの伝承でも神仏習合の形である。

作品内容は、菅原道真の氏寺である河内国土師寺を訪れたワキ僧（相模国尊性）に、老人が菅原道真の大宰府配流を暗示的に語り、木槲樹の木のいわれを述べ数珠を授け、天神の使者であるシテ白大夫の神が笏拍子を舞うという内容である。天神信仰と天神の本地が救済観音であるという仏教思想が示されており、こちらも「神や　仏とは　たゞこれ水波の隔てにて　神仏一如なる寺の名の」、「神力も仏説も　同じ和光の影」とあり、クリでは「仏の昔神の今」と道真の悲劇を語るが、華やかな舞楽を奏し、最後に「百八の煩悩をかたどる木現樹の数珠」に全体が収斂する。天神の眷属としての白大夫の舞は神遊びの世界で有るが、一方ワキに授

けられたこの木槵樹の数珠は、念仏百万遍を唱えれば、往生の志が遂げられるというもので、やはりワキ僧の出現といい、脇能としては異色といえる。

以上、天神信仰の広がりによって、仏を讃嘆することが、安泰な世界を創り上げ、翻って国家の祝福となることが確認できる。

また、王権と仏教が介在して神道と結びつく形式がある。『白髭』（観世・宝生・金春・金剛・喜多）は、別名『八景尉』といい、延年風流型の作品である。天皇の霊夢によって、江州の白髭明神へワキの勅使が向かうと、シテ白髭明神が仏教流布の地として土地の由来を語るという内容である。

白髭明神の地は釈迦入滅後に釈尊が姿を変えて、その地を訪れ仏法結界の地として勧請を要請される。翁は結界の地となったらば釣りをする場所がないと嘆くが、浄瑠璃世界の薬師如来がそこに出現して約束された経緯を老人が伝える。その老人こそが土地の神で白髭明神であり、楽を舞い、ツレの天女と竜神とが相舞で「一切衆生悉有仏性如来常住無有変易」の思想を示す。

他にも、寺社縁起と結びつく形で、仏教的な要素が入り込む脇能がある。例えば『久世戸』（観世・宝生）は、観世信光作で、丹後の国天橋立の久世戸は神代の古跡で天竺五台山の文殊菩薩を勧請したものであるが、天上から天女があらわれ、海中から龍神が出現して灯火をささげる。門守の神が久世戸の由来と文殊菩薩について語るという内容である。智恩寺は日本三大文殊と呼ばれる霊場であり、こうした寺社縁起をもとにした作品には神仏習合思想がある。

以上、仏教的な内容が脇能として機能していたことは明らかであり、翁の脇という純粋な土地の神への祝福から、日本神話から皇孫へとつながり、さらに仏教伝来という三国意識が働き、仏教が極めて強い正統性を顕示して、室町政権とつながるという混在する宗教観がここに立ち現われている。脇能のもつ本質的な主題は、室町時代当時の宗教的な影響下にある。以上、まだ種々の問題が残るが、脇能における神々が、様々な宗教的な装いをまといつつ、なおその土地土地を祝福し、日本国家を守るという方向性について論じた。

注

（1）謡曲詞章の引用は、伊藤正義氏校注『謡曲集』中（新潮日本古典集成　一九八六年三月　新潮社）に拠る。巻末の各曲解題では『古今和歌集序聞書』（三流抄系所説）が構想の根幹をなしている点に注目されている。

（2）世阿弥伝書『風姿花伝』・『音曲口伝』・『三道』・『申楽談義』の引用は、すべて表章氏校注『世阿弥　禅竹』（日本思想大系　一九七四年四月　岩波書店）に拠る。

（3）天野文雄氏『世阿弥がいた場所―能大成期の能と能役者をめぐる環境』（ぺりかん社　二〇〇七年二月）第一章「《弓八幡》成立の時と場」参照。

（4）例えば能に現れるワキ古代の天皇の臣下は、桓武天皇臣下（『金札』）、また藤原仲麻呂の乱によって廃帝とされた大炊の帝（淳仁天皇）臣下（『絵馬』）、亀山天皇臣下（『氷室』）等がある。今後考察しなければならない問題である。

―はらだ　かおり・文学部教授―